

## 『兩大戦期における金問題』

Академия наук СССР—Институт Экономики. Ф. И. Михалевский, «Золото в период мировых войн. —Первая мировая война. Экономические кризисы 1929 и 1937 гг. Вторая мировая война до принятия в США закона о передаче вооружения взаймы или в Аренду.» Огиз—Государственное Издательство Политической Литературы. 1945, стр. 236. 6 руб.

野々村一雄

### I

ソ連邦は南阿連邦に次ぐ世界第2の産金國であり、その金保有量もアメリカに次いで多い。ソ連邦の産金高および金保有量については、最近のソ連側公表数字が無いが、外國側の推算によれば、年産金量は、1947年に、戦時中の推定年産金高と同じく400萬オンス、1オンス35ドルで換算すれば1億4千萬ドルとされ（『國際決済銀行第18同年次報告』による。1947年の世界産金高は概算2770萬オンス、その中南阿連邦1120萬オンス、カナダ307萬オンス、アメリカ232萬オンス、である。）、また、その金保有量は1947年末25億7千5百萬ドルとされている（合衆國連邦準備制度理事會の推算による。1947年末の世界金保有量は404億8千7百萬ドル、合衆國のそれは227億5千4百萬ドル、イギリス20億2千5百萬ドル、ソ連邦を除いた歐洲全體で4億6千6百萬ドル、である。）したがってソ連邦の今後の「金政策」について、世界各國が異常な關心を寄せていることは、1950年2—3月のソ連邦通貨改革發表をめぐる各國の輿論についても明らかである。それ故に又、ソ連邦刊行の金問題についての論文や著書に對して、ソ連外の人々の持っている興味と關心とについては、蓋し想い半ばに過ぐるものがある。本書『兩大戦期における金問題』も亦、その表題よりして、このような意味での興味と關心との對象になり得るかに見える。だが、ここで、はっきりことわっておくと、本書は、そのようなソ連邦の金政策乃至産金・金保有統計に即いての研究報告ではない。（本書の數多い關係統計は最近のものについては「ソ連邦を除いた」《вне СССР》數字である。）本書は、反對に、資本主義諸國の關係統計および文獻をかなり廣汎に驅使した、資本主義諸國の金問題についての研究である。

1921年の11月、すなわち、ソヴェート政權の經濟政策の危機的な轉換の時期に、レーニンが『プラヴダ』紙

上に發表した論文、「現在および社會主義の完全なる勝利の後における金の意義について」《О значении золота теперь и после полной победы социализма》の中で、「ひとたびわれわれが全世界で勝利を得れば、おそらくわれわれは世界の若干の最重要都市の街上に、金で共同便所を建ててやるだろう。」と述べている（全集第2版第27卷82頁）ことは、餘りにも有名である。しかし、レーニンのこの言葉は、その前後を讀んでみればわかるように、金づくりの共同便所の建設を約束したものでない。彼が「おそらく」《думается мне》と附加していることを別としても、すぐそれに續けて、「1914—1918年の『偉大なる解放』戦争において、いかにこの金のために、1000萬の人間が殺され、3000萬の人間が片輪にされたか、そしてやはりこの金のために、1925年から1928年頃、多分日本とアメリカ、又はイギリスとアメリカ、又はこの三強國の別の組合せで新たな戦争が起つて、少なくとも2000萬人が殺され6000萬人が片輪にされる運命にあるか、——こういうことを忘れないでいるゼネレーションにとっては、これこそもっとも『公正』且實物教育的な金の使用法ではあるまいか。」と述べている（同上82—83頁）のである。

レーニンの第二次世界大戦についての豫言は、その言葉通りではなく、奇しくもソ連邦をもまきこんだ戦い、しかもここにあげられたアメリカおよびイギリスとのソ連邦の共同戦線において、戦かわれ、ソ連邦1國の人民だけで、殺された者は1000萬人を超えた。

1950年2—3月、ソ連邦が、このおそろしかった第2次大戦の被害からの成功的な脱出にピリオドをうつために、おこなった幣制改革を論評して、わが國の新聞のあるものはレーニンのこの言葉で自らの議論を裝飾した。しかしながらレーニンのこの言葉の含蓄——資本主義社會の「一般的商品」である金と、資本主義の矛盾の集中的表現である恐慌と戦争との關連——については、引用

者は一言も語らず、レーニンのこの言葉は、景氣のいい大言壯語として、又その部分だけが、利用されていたのである。

本書の著者ミハレフスキー Ф. И. Михалевский が、本書『兩大戦期における金問題』でとりあげている問題は、一般的に言えば、正にこの問題に他ならない。——マルクスは『経済学批判』および『資本論』の冒頭で商品生産社会の論理的歴史的な完成者としての資本主義社会における「一般的商品」・「絶対的商品」としての貨幣の諸機能を分析し、貨幣商品としての金の諸機能を規定した。かかるものとしての金=貨幣の役割が、帝國主義、特にいわゆる「一般的危機」の時期の中で具体的にいかなるものとしてつかまれねばならないか。金は競争國に對する金融的攻撃の武器となり、植民地・半植民地諸國の「絞刑吏」《Henker》となり、戦争のもっとも重要な準備物となり、戦争の「神經」《nervus rerum》、筋力《sinewes of war》、勝利の擔保物《Pfand》となった。

一般的危機の下における植民地・半植民地壓迫の武器としての金機能は、たとえば本書が130頁以降でとりあげている所の問題、恐慌時におけるインドその他の東方諸國よりの金の對西歐輸出の中に反語的にではあるが、はっきりと示されている。ここでミハレフスキーは、資本論第一卷第三章の記述（アドラッキー版136頁）を引用して、19世紀における銀、ついで金のインドおよび中國等東方諸國への流入を指摘したあとで、世界經濟恐慌時においては、恐慌の負擔がこれらの東方諸國、植民地・半植民地諸國へかかってきたために、これらの諸國の購買力が削減され、必要なものも買えなくなって、これらの諸國では貴金屬退藏からの脱化《детезаврация》がおこり、これらの諸國から逆に金が西歐へ、潮の充ち差して行くが如く流れ出たという（《Прилив золота с Востока》 стр. 130）。戦争準備金としての金機能は、本書の冒頭に出てくるところの、第1次大戦前後における金の異常な集中《централизация》の中にはっきりと示されている。しかもそれが19世紀の最後の三分の一における、すなわち帝國主義への轉化における資本輸出がひきおこしていたところの、世界全體としての金の分散化過程《процесс децентрализации золота》の進行に引き續くものであるだけに、一入興味深いものがある。1913年末、世界の金保有の約70%が、米・露・佛・英・獨・澳洪國の6ヶ國に集中されおわった時、あの第1次世界大戦が始められた（本書14—15頁）。第2次大戦においては、戦争の「筋力」、勝利の「擔保」としての金の重要性は更に躍進する。——「もしも第1次世界大戦の間にイギリス政府が莫大量の金を株式會社銀行お

よび個人銀行の處理下に残しておいたとすれば、今や第2次世界大戦の前夜においてはイギリス政府は金をイングランド銀行《Английский банк》からさえもひき出し、アメリカ合衆國は、周知のごとく、1934年に既に自國の金準備を銀行體系からひきはなしていたのである。」（本書147頁）（ミハレフスキーはこれを「金の國有化」《огосударствление золота》或いは「金準備の國有化」《огосударствление золотых запасов》と呼んで、これに特別の1章を宛てている。）また、第2次大戦の進行につれて侵略國獨・伊・日の金準備は急速に減少する（183頁）、ここから、理論の面におけるナチス式金不用論《Гитлеровская «теория» демонетизации золота》（第3部第2篇第8章）と彼等の實踐面における「金のためのファシストどもの鬭争」（第3部第2篇第10章）という理論と實踐とのみじめなナチス的二律背反が生れている。

本書がめざしているものは、上で見たように、われわれの住む社会内におけるかかるものとしての貨幣商品・金の役割であり運動である。多くの金問題文獻は「金の生産」・「金の移動」については詳しい。それらは、たとえば國際決済銀行の各年次報告の中に、かなり克明に記載されている。資料的には本書はそれらに依存している。（本書の讀者は、本書の隨所に、右の報告よりの引用や、引用符にかこまれた《FRB》の文字を見出すであろう。）しかしながら、本書をしてソ連邦領域外の金問題文獻と自らを分たしめるものは、金問題の分野における、右の如き主題、右の如き問題の提起に在る。このことをまずここでことわっておきたい。

## II

本書の著者ミハレフスキー Ф. И. Михалевский の著作活動については1924年に發行された經濟学入門をまず挙げるができる。——

- (1) 《Начальный курс политической экономии》，1924，《Московский рабочий》（『經濟学入門』1924年「モスクワ労働者」發行 邦譯 荒川實藏 1929年11月改造社發行）

當時著者は新進の經濟学者として西方小民族學院の教授であったという。その後の著者の活動は金問題、しかも資本主義諸國における金問題の研究を中心として展開され、金問題については、今回ここで紹介される本書の他に、次のものを数えることができる。

- (2) 《Валютная разруха капиталистических стран》，《Проблемы Экономии》 № 5, 1933 г.（『資本主義諸國における本位貨崩壊』雜誌『經濟学の諸



問題』1933年第5號)

(3) 《Золото как денежный товар》Соцэкгиз, Москва 1937 г. (『貨幣商品としての金』モスクワ國立社會經濟圖書出版所 1937年 邦譯 田中長三郎譯 白揚社發行 1938年12月)

(4) 《Золото как мировые деньги и валютный диктат США》, 《Вопросы Экономики》, № 1, 1950 г. (『世界商品としての金とアメリカ合衆國の立場』雜誌『經濟學の諸問題』1950年第1號)

本書は、原文表題の示しているように、ソ連邦科學アカデミヤ經濟研究所の編纂・刊行にかかり、國立出版所の政治文獻出版所より1945年に發行された書物である。本書の取扱う時期は、その表題の示しているように、兩大戦期すなわち2つの世界大戦とその間の諸年であり、具體的には、副題の示しているように、第1次世界大戦、1929・37年恐慌、合衆國の武器貸與法發布までの第2次世界大戦期、の3時期にわたっており、その間における貨幣商品としての金の機能變化とそれが金そのものの生産・移動に及ぼす効果、別の言葉でいうならば、右の諸時期における金問題を中心とした本位貨・貿易諸政策とその諸効果についての研究である。

右の如き主題とその意味とについては私は、既に先をいそいでIでこれを述べてしまった。今や、われわれは、右の主題がいかに展開されているかについて問わなければならない。

本書のように、多分に記述的・歴史的な研究については、限られた紙數の中で、その内容全體についての一應の解説すらも與えられないと思う。したがって、ともかく、本書の構成を以下に示しておく。

#### 第1部 第1次世界大戦

第1篇 第1次世界大戦期前の金の生産と集中(第1章 金の生産, 第2章 大戦までの金の集中, 第3章 大戦開始前の世界の金準備)

第2篇 第1次世界大戦における金の役割(第1章 概説, 第2章 戦時信用の基礎としての金, 第3章 金と在外資金の獲得, 第4章 金と爲替相場下落, 第5章 發券の費用, 第6章 金の流通停止にひき續く金以外の金屬の流通停止(補助貨恐慌))

第3篇 第一次世界大戦における金の移動(第1章 フランス, イタリア, 第2章 イギリス, 第3章 ドイツおよびその衛星諸國, 第4章 中立諸國, 『金インフレーション』, 第5章 1918年末にいたる金の集中)

第4篇 戦後の諸年(第1章 戦後の通貨混亂における金, 第2章 20年代の安定の特徴, 第3章 資本主義の一時的安定期)

#### 第2部 世界經濟恐慌および1937年恐慌期における金

第1篇 世界經濟恐慌と本位貨恐慌(第1章 本位貨恐慌と爲替ダンピング, 第2章 金本位離脱の諸方法)

第2篇 爲替ダンピングと金の價值尺度機能(第1章 單純商品生産の諸条件下における金の價值尺度機能の『メカニズム』第2章 資本主義の諸条件下における金の價值尺度機能のメカニズム, 第3章 爲替ダンピングおよび金に對する打歩の諸条件下における金の價值尺度機能)

第3篇 本位貨恐慌と金生産(第1章 金生産と産業循環, 第2章 金の「價格」, 第3章 爲替ダンピングによる打歩と金生産, 第4章 金の技術的利用, 東洋よりの金の流入)

第4篇 本位貨恐慌の諸条件下における退蔵貨幣としての金の機能(第1章 貸附資本の恒常的「失業」, 第2章 貸附資本の「金への轉換」第3章 個人の退蔵)

第5篇 金の國有化《Огосударствление》, 集中および移動(第1章 概説, 第2章 1931—1933年, 第3章 1934年より1938年秋まで。概説。第4章 同上期間におけるイギリス。爲替平衡勘定。第5章 同上。合衆國。安定資金。第6章 同上, フランス。安定資金。)

#### 第3部 第2次世界大戦

第1篇 第2次世界大戦の前夜(第1章 概説。以下第4章まで, 英・佛・米の各國別の各論。)

第2篇 第2次世界大戦(第1章 第2次世界大戦勃發までのイギリスの金準備およびその他の爲替資金, 第2章 爲替統制の諸政策, 第3章 貿易尻決濟の諸手段, 第4章 イギリスの支拂バランスにおける金の比重, 第5章 フランス, 第6章 合衆國の武器貸與法, 第7章 1943年にいたる第2次世界大戦の各年における金生産, 第8章 金の流通停止についてのヒットラ主義『理論』《Гитлеровская «теория» демонетизации золота》, 第9章 ヒットラー主義『理論』の目的, 第10章 金のためのファシストドイツの闘争。)

補論 第1次世界大戦の金バランス

### III

序言も緒論もなく、開題第1頁から第1次大戦時に

おける金問題にはいつているこの書物の内容全體を通讀し、前著『貨幣商品としての金』と比較してみると、本書は同じ人の前著の繼續であり、部分的には前著の記述の體系化であることがわかる。そういう意味で、本書は著者のかなり永い間の研究テーマの最初の体系的な答案であろう。大體同じテーマを取扱ったといつてもいい前著にくらべて、構成ががっしりしており、問題の取上げ方も包括的であり、取扱いもかなり理論的になったことが目だつが、実際には、取扱う問題の量と敘述のスペースとの關係で、この書物と雖も尙、各時期・各國別の説明をやや体系的・理論的におこなつた程度のものでみている。

ついでにもう1つ前著と異なる點をいえば、前著においてかなり多くの部分を占めていた金生産の技術的な、或いは商品學的な側面についての敘述（前著の第2部）は、本書では省略されている。そういう意味では、本書は、同じ著者の舊著より一步を進めて、もはや、金の商品としての特殊性に執着することなく、戦後資本主義、すなわち、いわゆる一般的危機期の經濟一般の中での金の意義・運動をもつばら經濟學的に、つきとめようと努力しているのである。ただ、恐慌・戦争時における金機能の變化と恐慌・景氣事情とが逆に金の生産・その工業的利用・金の移動の上にかに反作用して行くかについての敘述には著者が相當の頁を割いている（第1部第3篇、第2部第3篇・第5篇、第3部第2篇第7章、その他）ことが、本書をして、經濟恐慌、特に本位貨恐慌時における通貨・爲替・貿易政策及び事情についてのソヴェート側諸學者の研究から自からを區別するきわめて重要なメルクマールをなしており、その點、本書は、ヴァルガ E. Варга, コズロフ Г. Козлов, アトラス З. В. Атлас による關係諸勞作——それらはわが國の讀者にも著名である——とならべてみてもやはりユニークな地位を占めている。

ところで、そのような特異點が、彼等のいわゆる「ブルジョア文獻」たるソヴェート圏外の金問題諸文獻と比較した場合、どの程度に評價されていいものかどうか。實は、専門家でない私には、よくわからない。前にも述べたように、問題の性質上、本書の資料的統計的基礎はすべてソ連邦圏外の關係諸機關、たとえば國際決済銀行、合衆國連邦準備制度理事會等々の諸報告、および、個人的な専門家の該當文獻等々に置かれており、ソヴェ

ート連邦の資料・統計については概ねこれを除外しているために、新らしい統計や事實を提示しているかどうかという點では、おそらく、ソヴェート圏外の金・貨幣問題専門家の期待に應え得ないのではあるまいか。細かい技術的な點で、著者はこれらの人々に異論を出している（たとえば、著者が恐慌時の金移動を考える場合の1つの問題點としている、金の年産額における工業的利用額の比重に關してであるが、Worren and Pearson, Gold and Prices, 1935. の推定額 40—50%を本書の 129 頁で「確實に誤まりだ」《это определенно неверно.》と切り切っている）が、こういう問題について、どの程度に著者を信頼していいものかどうか、そういう點の信頼度は著者の經濟學的な研究の信頼度にも關係していると思うのであるが、この點については、私は、専門家でないので、何とも云えない。

ただ、たとえば、第1次大戦前と比較しての第2次大戦前の各國金準備の集中度の高度化——1913 年末に米・露・佛・英・獨・澳・洪國の6カ國で全世界の70%弱のもの（14—15 頁）が、1938 年中頃現在、全資本主義國の發券銀行・國庫の金準備の76%が米・英・佛に集中されていること（182 頁）、更に第1次大戦には後の敗戰國も亦一應主要な金保有國の列に伍していたものが、次の大戦では交戰國の一方に金の偏在が見られること——については、資本主義發展の不均等性という視角からすれば一應筋の通つた説明が與えられ得るし、恐慌時における貸付資本の金への逃避《золотое перерождение ссудных капиталов》を「貸付資本の恒常的失業」《устойчивая безработица……ссудных капиталов》として、それを「厖大なる勞働者大衆の恒常的失業《устойчивая безработица……рабочих》の別面を成す」と斷定する（136 頁）點等は、こういう點について「中立的」な金問題文獻が事實や統計の提示に終つて中立的専門的な立場と限度とを守ろうとしているのと比較して、その當否は別として、いい對照を成して面白。

本書については、まだとり上げたい問題が多い。恐慌時における、金本位離脱→爲替ダンピングと、金の爭奪戦と、これらの恐慌回避策における金の役割や、資本主義の浮沈興亡と併せて見た特殊な産業としての産金業の企業經營の問題、ナチス式金不用理論をも含めたナチス金政策とその批判、などがそれである。残念ながら別の機會にゆずらねばならない。